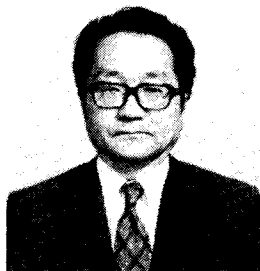


初心忘れず

日本熱測定学会長 神戸 博太郎



1980年の年頭にあたり、会長として会員諸氏の御健康を祝し、日本熱測定学会のより一層の発展のため所信を述べる。昨秋、熱測定討論会は第17回を数えた。1965年関集三教授らの提唱で、第1回の討論会が大坂で開かれたのが契機となり、

その世話人会がやがて熱測定研究会を結成し、1971年第7回討論会からは熱測定研究会が討論会の主催者となった。ついで1974年、日本熱測定学会が結成され、今日に至っている。私はたまたま熱分析法による高分子の耐熱性の研究に従事していて、当初よりこの討論会の経過を直接見聞する立場にあったので、まことに感慨無量の想いがする。

1973年1月、当時の熱測定研究会ニュースターに、研究会委員長であった私の巻頭言が掲載されているが、ちょうど研究会を学会に組織がえしようとしていた時で、われながら意気込んでいた当時の気持がよくうかがわれる文章である。そこで私が具体的に提案したいくつかのこと、たとえば作業グループによる活動など、は学生会員の制度を設けることを除けば、ほぼ実現しているといっている。しかし、現在学会活動そのものは必ずしも大きく発展したわけではなく、もちろん沈滞してしまったわけでもないが、おおむね定常状態にあるというべきであろうが、この規模の学会にしてはかなりの成果を上げている。

毎年の討論会の講演数は、2会場3日間に充ちる位で、なかなか盛況である。学会誌も季刊に切りかえて、原著特に外国語の論文も掲載するようになった。身近な問題としては郵政省の学術定期刊行物としての認可を受け、第4種郵便物の取り扱いが受けられるようになった。未だ法人格をもたない任意団体にすぎないが、われわれの学会がその業績を認められつつあることを示している。

創立者の関教授の卓見により、当初よりカロリメトリと熱分析を包含した態勢をとったことは、当時世界に類のないことであり、アメリカやイギリスの人々は、どうしてそういうことが可能であったのかとたずねるほどであったが、現在ではフランスに同種のグループ(AFCAT)が結成されたし、今後ますますこの傾向が強まるものと思われる。

毎年の討論会に必ず2、3名の外国人研究者の発表があるのが、ならわしになっている。初めの頃は、目ぼしい学者に、旅費の負担もしないのに、来日を依頼し、それでも多くの人々が応じてくれた。1977年に開いたICTAの国際会議の折にも、数十名の外国人が参加したから、熱分析の分野で著名な人は、ほとんど来日の経験をもったことになる。カロリメトリに関しても、多数の人々を迎えたことがある。

一方多数の日本人が外国に留学し、いろいろな形の交流ができた。もちろん、化学熱力学、熱分析などの国際会議にも、毎回10~20名位の参加者はある。国際交流といえば、公式には学会同士の情報交換などもあるけれども、根本はやはり人間相互の付き合いに基づいており、これが密接でない上べだけのものになってしまっていて、内容を伴わないことになる。外国語の障壁というものは確かにあるが、その気さえあれば片ことでも意志は通ずるのである。

国により、人によりやり方も、考え方もちがうので、外国人とつき合うのも楽ではないが、要はこちらから胸襟をひらくことであり、いっしょに食事をし、互いに自宅に呼んで家族ぐるみの交際が始まれば、学問的な議論もおのずと実のあるものとなるであろう。

私はICTAの役員を1968年からつづけてやっており、今年西独のバイロイトで開かれる第6回国際会議で(多分)その役を降りることになる。この間、アメリカ、イギリス、フランス、各国の熱分析学会に出席したことがある。定年で東京大学を1年後に退職する予定であるが、初心を忘れず、学会の発展に努力したいと思う。